

あつて、古典的な書となつてゐる。現代ドイツにおけるギリシアの壺に關するこのベスト・ケンナーの其後二十五年の精進が本書である。前著を「ギリシアの壺繪」と題し、本書を單に「ギリシアの壺」と名付けても、同一の立場、同一の意圖からなされたものである。しかし必して前著の改訂また補遺ではあるまい。本書の内に前著については一言も述べてゐないし、圖版には可成りの重複があつても、遙かにその數を加へてゐるのに反し、内容は頁數の増加にかかわらず少くなつてゐる。むしろ前著のより高度なより昇華されしものと思へるのである。

前著は石器青銅時代(エーゲ時代)、幾何學文様、七世紀、黒鉄、赤繪、フィディアス・ポリグノトス様式と章を分つに對し、本書は目次も章もなく、ただ節があるのみである。しかし大體において前著の様式區分を採つて、しかもより一層時代區別において、また地方區別において明確である。前著において稍々論理的に過重されて未だその遺物がそれに伴はぬきらひのあつた部分、例へば幾何學文様七世紀におけるクレテやアルゴリス地方の意義の如きは、本書においてや、輕んじて、アッティカがその中心において美事なその發展過程を示されてゐる。彼においては實に一つの壺にも一定地方の一定時代の精神を解明し、且つそれをば全世界との關聯において見んとするのである。即ち一つの壺にも時代の歴史を讀みとるのである。従つて彼は幾何學文様にしてもアルカイック、クラッシック、パロックの發展を辿り、また本書は前著とは異つて大體において幾何學文様より初めてゐる。もとよりエーゲ

文明との關聯は無視し得ないとしても、飽く迄純正なギリシア精神に主眼を置く時、これは當然のことである。

しかしかやうな立場は明徹鋭敏な直視力と「物」に對する鑑識眼を伴はずば、甚しい獨斷と歪曲に墜るであらう。この點においては久しくアテネの獨逸考古學會長であり、今も大學が休となれば必ず勿々とサキスの發掘に赴き、常にはミュンヘン大學にギリシア考古學を講じてゐる彼に、安心してよいであらう。更に Furwängler の Griechische Vasen の大業を繼ぎ、Corpus Vasorum Graecorum の獨逸部を擔當してゐる。

全文アト紙にて二七二頁の豪華本。戰時下のドイツ學界と學者がなほかやうな根源的領域に擱り進んでゐる一つの證。(十三マルク)〔村田數之亮〕

日本國土計畫論

石川 榮 謹著

今や世界歴史はその大轉換期に直面してゐる。この秋に當り我が國が東亞新秩序、否、世界新秩序の建設で未曾有の大業を遂行しつゝあること、茲に改めて申す迄もない。而もこの肇國以來の大業達成の爲めには、國防國家の建設といふことが切に要請せられてゐるわけである。

國防國家の建設は、今次の歐洲大戰以來正に世界的な動向となつてきた。而して國防國家の出現乃至その體制の強化には、國土計畫の完成が要望せられるのである。

此の點に鑑み、昨秋企畫院から我が國將來の國土計畫の要綱の發表を見たわけであるが、閣議で決定したのは國土計畫の設定要綱だけであつて、どんな國土計畫が立てられるかは其の以後及び將來の事に屬する。

石川氏著の本書には、右の日本國土計畫に對する「諸試案」が述べられてゐるのである。本書は二部より成る。即ちその第一部は「國土計畫方法論」、第二部は「國土計畫に關する特殊論考」となつてゐる。

第一部に於いては「國土計畫の史的發展」(第一章)より説き起して米・蘇型、英・獨型あることを示し、著者が序文に云ふ如く「マジノ線を越えたもの」としての獨逸の國土計畫の輝しき成果を述べ、次は第二章「國土計畫の諸相と日本國土計畫の形態及その主要課題」では、米・蘇・英・獨の諸形式に對し、日本の取るべき形式について、それが「獨逸の如き一國計畫を建てる他に東亞共榮圏をも構成しなければならない」との特異性、並びに日本國土計畫の主要題目が「大都市の處理、地方の振興、開發——工業による場合、農業による場合——及その綜合である事」を明かにし、第三章「日本國土計畫の概貌」に入つては「國土の構造」に即する「諸試案」を擧げて「全國的な地域配分及施設等の諸計畫」を試み、次いで「此れの具體化としての地方計畫」に及ぶわけであるが、第四章に於いては其の最も重點たるべき「大都市地方の處理」に論及し、「大都市地方の處理に次で——或は此れと相伴つて——着手されなければならない」「一般地方の計畫」としてその主

眼たるべき「地方圏の確立及その權威」につき第五章で論究してゐる。かくて第六章「結語」に到つて「大東京に何等手を加へ得ざるものは國土計畫でない」と云ふ事と、「工業地方分散の重要な眼目として、工業の人的立地、農業との關聯がある事」を強調してゐる。更に「一際の國土計畫の最後の目的は大和民族の繁榮」であり、「それは量のみを繁榮ではない。質——それも「心の質」である。それは生活圏の計畫によつてのみ達せられる。」と云ふ事をそれ以上の強さで主張してゐるのである。

以上が本書の第一部の内容であるが、本書の著者石川氏は都市計畫に携ること既に二十年、「都市計畫は國土計畫の細胞である」故に「國土計畫の技術の本質により自分達こそ、このまゝに國土計畫の最前線にあるもの」、従つて「國土計畫の態度により總てを處理して行かなければならない」との自負によつて計畫される事既に十年に近い。以て本「日本國土計畫論」は正しくその人を得てゐる。その説く所、間々獨逸、英國、米國等の國土計畫論を參考に供し、その取るべき長所を明かにしてゐる。猶ほ叙述に當り平明を旨とされた點は、諸所に圖・表を適時示された事と相俟つて理解に便である。

右の第一部に於いて國土計畫に對する著者の解釋の主要を盡されたわけであるが、その中で著者は「生活計畫」及「地方都市振興」に關する項について尙云ひ度い事を殘されたので、第二部に及んで既に二、三の方面で發表せられた著者のそれ等に關する論文を改訂の上加へられたのである。次にその目次を掲げること、

しよう。

第二部 國土計畫に關する特殊論考

第一章 國土計畫の最終課題たる生活計畫について

第二章 都力測定及都力より見たる日本の國土構造

第三章 本邦各都市に於ける工場誘致の概況

第四章 國土計畫と商店街

第五章 都市計畫による都市振興讀本

かくて第二部は本書の主題でもあるのであるが、その各章の紹介は暫く措くとしても、右目次に見らるゝ如く種々の方面より郷土日本の將來に對して、くもりなく、然し強く張りたる眼を放たれてゐる。著者の意圖する所は、本書によつて何人かの人達が、又かくあらんことを希はれるわけである。

國土計畫の問題は地理學と多く交渉の面をもつ。地理學に限らず、他の諸科學との關聯も大である。こゝに於いて本書を地理學徒のみならず、廣く諸學の徒に、尙更に廣くは一般國民に一讀をすゝめたいと思ふ。かくてこそ當今の要請たる高度國防國家日本の建設は著しく促進されることとなるであらう。

石川氏の原著と共に、慶大教授與井復太郎氏の國土計畫論、商工省吉田秀夫氏の國土計畫論等を併せ一讀せらるれば、國土計畫の何たるかが一層明快となるであらう。(昭和十六年五月、東京八元社發行、A5判三六八頁、定價三圓六十錢)〔西田和夫〕

開拓民問題

入江久 夫著

滿鐵弘報課編「東亞新書」の第一期刊行書の一つとして「開拓民問題」が出た。著書入江久氏は京大地理出身、滿鐵調査部勤務の人である。開拓民乃至開拓民問題に關する文獻は極めて多い。官廳の報告、或は案内書風のものの、開拓年鑑の如く全般を知るに好都合のもの、公私様々の視察者の報告、もつとくだけで小説、隨筆に類するもの、或は農業又は經濟の専門家の研究調査等、汗牛充棟も只ならざるものがある。それ等の中にこの「開拓民問題」は僅かに八十頁餘の小冊子として登場したに過ぎず、極めて微々たるものであるが、其の内容に於ては決して貧しいものではない。著者は、開拓民の通つて來た過去の道は、日本の農村の立場から、或は滿洲の政治經濟的理由から、多くの紆餘曲折があり、今となつて見れば道標の置きどころを變へなければならぬところが多くなつて來たが、そこに開拓民問題が起つて來るとなして、先づ問題の所在を明かにし、國家によつて與へられる開拓民の使命と、開拓民の私經濟的立場との間に隔りがあり、開拓民の立場は開拓國策と私經濟が相調和する點に置かれる、と説いてゐる。次に開拓地農業の實際を記して、開拓民が滿洲へ來て先づ習得しなければならなかつた在來農法が、一般に自家努力の少い開拓民に取つて多大の雇傭努力を要し、それが負擔の最大なるものとなること、また北滿で一〇町歩といふ經營規模は滿人農家で云へ